

芸術家としてのアプローチ

大抵の場合、私の中から自然に発生する動きによって描き始めます。この動きは素早い動きですが、何時間もかけて描くうちに育っていき、私が求めるところへ広がっていきます。

紙やキャンバスの上で、水の要素を用いるのが好きです。インクや顔料と出会って「一体化」する時、作為と無作為が相対するところにクリエイターとしての昂揚感を覚えます。

それは言わば、起こった出来事に対して何かを感じ、悲痛から喜びまでの感情が様々な態度で現れる「今現在」をイメージ化するようなものです。そこに、私の作品の構成が浮かび上がってくるのです。

あらかじめ構想を練ったり、明確なコンセプトを意図することはありません。作品は自然に口をついて出てくる歌のように、私自身の内側から生まれるのです。内側に潜む神秘が作品を作り上げるのです。世界に対する私の視点の一貫性と刷新性を同時に纏った「絵画的詩歌」なのです。

人間の条件を自然性と啓示という観点から熟考したものが、私の作品に反映されています。それは影から光へと向かう人間のスピリチュアル性への賛美です。

作品の骨格はこのようにして形作られ、仕上げられていきます。この骨格が本質的な要素をすべて備え持ち、ただ1つの達成可能な技法のみで表現できる時、私は夥しい探求の時間をかけ、時にはさらに一歩進むために解体しなければなりません。

作品が生き物であるかのように、「肉体と心」の長い取り組みあいは情熱と官能をもって行われます。それが、何日も何ヶ月もかけても満足のいく作品に仕上がらない時、正真正銘の闘いとなります。

この闘いは自問を繰り返す苦しい期間ですが、粘り強さで脱皮するのです。そして最終段階まで描き続け、仕上がった時、作品はひとり立ちして生きるこ

とが出来るとはなりません。

どの絵も独特の特徴があり、似通っていません。創造されたものは、たった今、生きているこの私であり、考えていることなのです。

私は自分が同化できる独自の領域に入り込んでいき、それによって調和の取れた構成を展開していきます。作品を生み出す中で、時には不安や疑い、混乱など、人間が経験する苦悩に見舞われますが、この脆くつかみどころのない世界の中から沸き起こり高まってくる力で作品を構築していきます。

こうして私の絵は少しづつ形を成しますが、時には出来上がった作品を見て心の奥で響くものがあることがあって初めてその絵を理解することもよくあります。ですので、タイトルは滅多につけません。私の作品はそれ自身が語るのです、音楽のように。

技法は様々なものを学びました。よく使うのは「ミクストメディア」と呼ばれるもので、混ぜたり上塗りする技術です。このおかげで得たい効果を自由に得ることが出来ます。

例えば、墨やクルミ染料を描き出しに用いて構成していくのが好きです。これで根を描いているような効果が出ます。また喩えると、土の色は人間の本質的条件を思わせます。黒い墨は灰、腐敗物、死。クルミ染料は土、自然の驚異、脆さ。

描写することから抜け出す必要を感じ、私はおのずから抽象画に進んでいました。困難で要求の多い世界です。抽象画では自分自身がただ一人の審判員で理性と狂気の境界線はほんのわずかだからです。

ふらふらと行先を失ったり、虚無に身を投じないためには厳格でなくてはなりません。それでも意味を成すものであれば、現実存在する物を暗喩として使って描くこともあります。

この叙情的な自由さで、自己超越を体験するのです。私は現実の世界と無形の世界の境にいます。そこは問いの場所です。私は人間の根本部分である、「影と光」を表現するという探求の只中にあるのです。

